



① 嶋原さんによる桶に使うタガを作るワークショップが開催された ② 壁一面に木網唯氏の描いた似顔絵が展示された
③ 桶に使うタガを使った飾り付けがされた ④ 木網唯氏が描いた川俣町の街並みの絵が展示された

豊かさを広げる

自分が住む町の新たなイメージや可能性を探る「地域のスタディ」。自分が住む町の「豊かさ」について考えたとき、町の新しい魅力に改めて気付くことが出来ます。

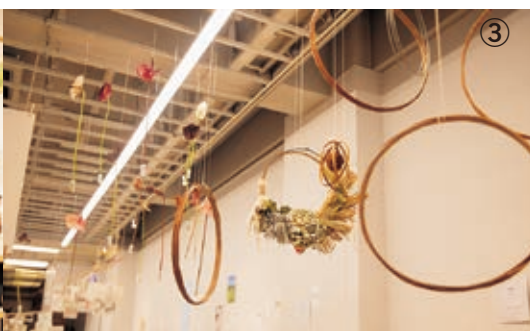
豊かさは地域に

地域に眠る豊かさについて学ぶことを目的として開催された「地域のスタディ」。その一回目となる企画「川俣町での暮らし」が暮らしの良品いげた（福島市）で開催されました。この展示では、川俣町で暮らした絵描きの木網唯（本名：橋内英勝）氏の絵を主軸に、川俣町で暮らすことの豊かさや川俣町にある豊かさについて、スタディ（学ぶ・研究）することを目的に開催。川俣町の新たなイメージ、この町で暮らしていくことの可能性や魅力を3か月間発信しました。この展示を企画したのは木網唯さんの姪孫にあたる遠藤典子さん。遠藤さんは「偶然伯父の家を訪れ

たとき、1万枚近く描かれた街並みや人物の絵を見つけたんです。毎日描いていたという絵はまさしくこの町の暮らしを表現したものであり、その数はこの町の魅力にもなるんじゃないかと思いました」と企画のきっかけを話します。

豊かさは人に

今回開催された企画展には、川俣町の多数の企業が協賛し、印刷・製本や資材提供がされました。遠藤さんは「本当の豊かさって人にあると思うんです。今回この展示ができたのも町の人たちの協力があつてこそ。人の豊かさを学んで、感じて川俣町がどんどん豊かに、魅力的になっていったらいいなと思います」と笑顔で話しました。



川俣町の豊かさについて考える

地域のスタディ「川俣町での暮らし」を企画した3名のメンバー。それぞれが違う町で暮らす3人の目には、川俣町はどのように映ったのでしょうか？川俣町を知り、そして展示をした皆さんに川俣町の豊かさについて聞きました。

東京、福島、川俣、3つの視点から捉える川俣町の豊かさとは——



建築家
大和田 栄一郎さん
(東京都)

地域のスタディを企画する2年程前から川俣町には何度か訪れていました。私がお会いした川俣町に関係する方々からは、土地と人間との非常に強い結び付きを感じました。昔からの土着的、人情的な慣習や文化が今でも残っていて、そうした人と人、人と場所とのつながりの強さこそが、この地域の豊かさの一つではないかと思います。地方から人がどんどん減っていく昨今の状況の中で、『土地に根差す』という考え方や生き方は、とても困難な事なのかもしれません。しかし、川俣町に積み重ねられた文化や歴史を学び、この場所で豊かに生きてきた先人達の様々な記録や証言から、これから、この場所で、豊かに生きていく方法を探っていきたいと思いました。

私が思う川俣町の豊かさは技術や歴史、芸術などそれを継承する人や建物などが身近にあって気軽に触れ合えることだと思います。川俣町のことを調べるなかでたくさんの人と触れ合う機会がありました。初めて挨拶に行く私に対しても優しく接してくれ、快く取材を引き受けてくれました。また、個性を持って、自分なりの試行錯誤や創意工夫を重ねながら生活、活動していくパワフルさ。これも今回「川俣町での暮らし」を企画・展示していく中でそんな所に川俣の豊かさを改めて実感しましたし、私自身もパワーをもらいました。これまで以上に川俣という場所とその暮らしに興味が湧いています。

川俣考現学会
遠藤典子さん
(小網木)



豊かさは、日々馴染んでいて、住んでいると当たり前になっていくこと・ものなんじゃないかと思います。決して頑張ったり見栄を張るものでなく、無理なく根付いているものとか—

もしかしたら、絵描きの木網唯さんは川俣での自分の暮らしの中に豊かさを見つけていたのかもしれませんが。そう思うと、豊かさを見つけようとする心そのものが、豊かさなのかもしれないです。

人にとっての豊かさの価値観はさまざまですが、川俣町で暮らす人たちと関わるうちに、私も自分の住む環境の中に豊かさを見つけようとする気持ちを持ち続けていきたいと思いました。

グラフィックデザイナー
高野侑美さん
(福島市)

